

「東日本大震災と私」

作成者 T.N2

I wanted to write this text about "Tohoku Daisinsai (North Japan huge earthquake)".

I planned to express many things in this text.

But, I could not remember every thing perfectly.

So, I had a plan to make up some adventure game concerning this disaster. I thought that it would be good to express my opinion.

Once I wrote a text. But, I got some report that it might give some discomfort to victims in the stricken area.

So, I repaired it.

This was rewritten in this reason.

I want the recovery in the damaged area as soon as possible.

3月11日金曜日。それは、中学校(中高一貫校)を卒業したのにもかかわらず、学校に来なければならなかった日のことだった。

我が母校には、独特のしきたりがある。

それは、卒業式を終え、中学校を卒業したにもかかわらず、離任式でもないのに学校に来なければならないということだ。

高校の卒業式の日程に合わせているため仕方がないという事情もあるのだが・・・。
その日は給食がバイキング形式の日だった。皆は、残すのがもったいないということで、多くのパンやパスタなどを少々無理して頂いた。

しかし皆、楽しそうであった。

五時間目は体育であった。皆は食べ過ぎた後に走ることに多少の不安を感じていた。

六時間目にはこれから行われる「立志の会」の練習の時間であった。

先生が来られるまでのわずかの時間、皆は束の間の自由を謳歌していた様に見えた。

すべてはいつも見ることのできる日常の光景だった。

まさかあんなことが起こるとはまだ誰も予想していなかった。

いや、できるはずが無かった。

・
・
・

地震が起こったのだ。

マグニチュード 9.0 の巨大地震。

この後の日本に大きな爪痕を残すことになる、歴史的な地震である。

私達は机の下に隠れた。

このようなときに、真のリーダーシップとは発揮されるものなのかもしれない。

生徒の自主的な呼びかけにより、机の下への退避は迅速に進んだ。

隣の人と話し合う人もいた。泣き出す人もいた。

そんな中で、私のテンションは上がっていた。

日頃滅多に出会えない異常事態である。

そのような事態に陥った私は、確かに未体験事態への突入に、心が大きく揺さぶられた。

しばらくすると先生が来られた。先生もあわてているらしい。

教室は地震の影響で停電になっており、いつも青白い光を与えてくれる蛍光灯も黙ったままだ。

電気がなくなった教室は、何かが足りなくなったように感じられた。

先生から荷物をまとめて帰り支度をするようにと言われた。

いつもならば早く帰れることに喜びを感じるのだが、なにやら物々しい雰囲気のある教室では、喜んではいけないという自分の心の声に従った。

しかし、どこへ行くのだろうか？ 体育館だ。

その体育館への道中の私も陽気だった。

考えていたのは大して面白くもないこと。

何か特別なことをやろうとしているわけでもない。

つまり、特に理由もないのに、あのときの私は興奮していた。

精神が異常な昂ぶりを見せていた。

体育館に着いた時、高校生はすでに多くが帰っており、体育館に集まったのは主に中学生であった。

その後、母が迎えに来てくれたため、早々に帰ることができた。

・・・・・・・・その後のことは多くを語る必要はないだろう。
地震の影響で電気が止まり、水道が止まり、物流が止まり・・・・
これで多くの人が不安を感じ、恐怖を抱いた・・・

今から思い返せば、地震当日の私は、不謹慎の塊のようなものであった。
地震の全貌も知らずに、何か心が躍っていた。
実際に被害に遭っている人のことを考える余地は全くなかった。

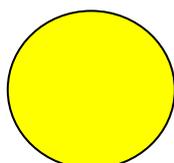
たしかに地震は多くの災害を生むということは知っていた。
しかし、「知っている」と「わかっている」ということには
天地の差があるということを改めて理解した。

その後友人たちにその日のことを聞いた。
皆、その地震で恐怖し、同時に沿岸部のことを心配していた。
あ那时的私とは違って、である。

しかしこのことを書くときには、私も多くのことを考えた。
自分の思ったことをそのまま書けば、それは社会から責められることは自明の理であり、
しかし誰もが思うような感想を書けば、それは私の真に思ったことではない。
だが、当日のその瞬間の感情は、偽りもなく、「興奮・躍動」だったかもしれない。
そのような自分を、私はその瞬間は、嫌うどころか、好いていた。当日の心情をそのまま
書くことを許してほしい。

駄文を書き連ねてしまい、申し訳ない。

あれから四ヶ月ほど経った。
多くのものが元に戻って来ている。
自分の周辺には、もう地震の爪痕は残っていないように見える。
しかし、まだ生々しく爪痕が残っている場所が日本には多数ある。
それを「知る」のではなく、「わかる」自分になりたい。
そして被災地の一日も早い復興を祈っている。



東日本大震災について
詳しく知りたい方はこちらへ